

『未来に帰った留学生たち』が考えるCUCの未来 —同窓会の新しい活動課題に向けて—

平成21年11月にそれまでのタブロイド版同窓会報を刷新し、同窓会情報誌として誕生した『きずな』。年3回発行、総頁数90頁を超える本誌は、同窓会ネットワーク構築を目標として今回、20号の節目を迎えました。なお、平成27年11月の同窓会定期総会で大幅な会則改正が行われ、新しい体制で走りはじめた同窓会。その同窓会の今後を担う若手・中堅世代の卒業生にお集まりいただき、これからの同窓会のあり方について語り合ってくださいました。(司会・濱野和人同窓会常任理事)

「私と大学」

—在学中に築いたもの

濱野 表紙に島田晴雄学長の描かれた絵画を掲載した『きずな』が、この2月で20号目を迎えることになりました。平成19年4月に学長が変わら

れて島田学長体制になり9年、その間に平成20年にサービズ創造学部、26年には人間社会学部、27年4月には国際教養学部が誕生しました。今回ご出席いただいた皆さんの学生時代は、1学部もしくは2学部だった千葉商大は5学部体制へと大きく変

化を遂げてきたわけです。本日は、同窓会の若手・中堅世代、前加藤学長の下で学生時代を過ごした皆さんにお集まりいただき、同窓会の今後についてお話しいただきたいと思っています。なお、「未来からの留学生」という位置づけで加藤学長時代に学びに取り組んできた皆さんが、社会に出てまた大学同窓会に戻ってきたというところで「未来に帰った留学生たち」という座談会タイトルをつけさせていただきました。

まずは、学生主導でさまざまな大学の取り組みが行われてきた中で、

皆さんが学生時代にどのようなことを実践されていたのかをお伺いします。

星野 私は、平成11年に経済学科を卒業しました。学生時代は自治会活動に取り組んでいました。新入生歓迎会のスポーツ大会を初めてつくったのは、私たちの代です。オープンキャンパスの創設では、2年次に委員長を務めました。また、リボンCUCと銘打って学外からゲストを招き、パネルディスカッションなどを開催したりもしました。自治会活動に対するモチベーションとなったのは、「第一志望でなかった大学だからこそ、自分の力で自分が好きになれる大学に変えていこう」ということでした。活動を通して仲間が増え、「千葉商大に来て本当によかった」と思えるようになりました。仲間と共によりよいものにと取り組んできた

ことは、社会に出た今でも精神の支柱となっていると感じます。

加藤 平成13年に経済学科を卒業しました。私はオープンキャンパスの活動を中心に学生時代を過ごしました。在学中は加藤前学長が大学改革を推進され、微力ながらそのお手伝いをできればという思いでした。当時の「大学のブランドを新たに作る」という意気込みが、各々の学生にも伝わる中で、何事も受け身ではなく積極的に動くことの大切さを学ぶことができました。

半澤 平成15年に経済学科を卒業した半澤です。大学では、生徒会の活動のようなものに挑戦してみたいと、ちようど大学の改革の時期に入学しました。学生自治会の執行委員会に所属して、オープンキャンパスや新歓のサポートなどの活動に励みまし

た。それとともに、学生の本分である勉学にも力を入れて、ゼミでは加藤前学長が会長をされていた公共選択学会というところの学生の集いで討論会に参加し、千葉商大で初めて優秀賞を頂いたり、卒業時には文化功労賞を受賞することができました。自治会の活動と勉強と、その両方に真剣に打ち込んだ4年間だったと思います。

宮坂 平成17年に政策情報学科を卒業したのですが、私が千葉商大に入るきっかけというのが、まさに半澤さん、濱野さんが仕切っておられたオープンキャンパスに参加したことでした。兄もスタッフに参加していたので、大学へ遊びに行く感覚で立ち寄ったのです。学生の皆さんがすぐく生き生きと大学をPRしている姿をみて、「この空間いいな」と感じたことと、やりたいと思うこと



星野 喜宏

平成11年商経学部経済学科卒業。在学中は、学生自治会執行委員会執行委員長を務める。商大OBの飲食店(渋谷)開業を経て、スカイツリー、大学、病院、ビル、マンション等の管理を行う東武ビルマネジメント株式会社勤務。座右の銘は、「何をしてもうかではなく、自分に何ができるか。諦めないこと」



加藤 弘樹

平成13年商経学部経済学科卒業。在学中は、オープンキャンパスのスタッフとして活動。キャンシステムアンドサポート株式会社、日発販売株式会社、東レACE株式会社を経て、ヒーロー電機株式会社に入社。昨年6月に取締役営業企画部長に就任。座右の銘は、「人事を尽くして天命を待つ」



半澤 広幸

平成15年商経学部経済学科卒業。在学中は、学生自治会執行委員会、オープンキャンパス、学園祭、新歓サポートなどの活動に従事。上場企業、外資系企業を経て、山栄物産株式会社 管理企画部へ。総務、人事、法務の管理系職務のほか、海外事業、新規事業創出と幅広く従事。座右の銘は、「行動する人間にとっては正しいことを行うのが重要な問題である(ゲーテ)」



宮坂 清佳

平成17年政策情報学部政策情報学科卒業。在学中は、オープンキャンパスのスタッフやチュードント・アシスタント(SA)として活動。現在、株式会社乃村工藝社にて事業戦略部に属し、事業戦略、事業部人事管理の業務などを行っている。座右の銘は、「継続は力なり。千思万考」



山川 司

平成17年政策情報学部政策情報学科卒業。在学中は、学生主導で取り組むエコキャンパス作りに挑戦。2003年3月31日にISO14001の認証を取得。ランスタッド株式会社にてキャリアコンサルタントとして従事。メディカル専門チームにて専門性の高い人材の転職支援を行っている。座右の銘は、「99対1の原則—時代を変えるためには、まずは自分が率先して変わる」



濱野 和人(司会)

平成15年商経学部商学科卒業。平成18年政策情報学研究科修士課程修了。在学中は、学生自治会執行委員会ほか、さまざまな活動に従事。卒業時に「学生アワード」を受賞。平成22年にディークリエーションを設立・代表。千葉商科大学・敬愛大学非常勤講師として情報系科目、黒川速算塾助手として珠算の指導にも従事。座右の銘は、「我為人々人々為我。I can do it」

にチャレンジさせてもらええる環境のある大学に行きたいと考えていたので、入学を決意しました。政策情報学部では、型にはまらない学びができる空間の中で、学びの場を広げさせていただきました。私も何か活動したいと考えた時に、やはりオー

ンキャンパスのスタッフに辿り着きました。もともと大学でチャレンジしたかったことが、人の集まる場の創造や次へのきっかけになるような「情報」の場を提供するような空間をつくることだったので、自分が体験したことをオープンキャン

パスで伝えたり、SAとして後輩をサポートし後継者へきっかけをつくることに打ち込みました。
半澤 宮坂さんはオープンキャンパスで配布する冊子のデザインなども担当していましたよね。
宮坂 はい、皆さんから情報を提供

していただき、徹夜でパソコンにとらめっこしながらデザインしました。その頃、「人の集まる場をつくりたい」という思いが、そのまま現在の仕事につながっています。

山川 宮坂さんと同期の、平成17年政策情報学科卒業の山川です。政策情報学部2期生なのですが、「人は何かを選択しながら生きている」という井関初代学部長の言葉のように、自分の未来は自分で最適な情報を選択しながらつくっていくという思いで入学しました。在学中は、ISO14001の取得を日本で初めて学生主導で行いました。リーダーとして活動し、3年の時に無事に取得。やりきったという経験をすることができました。このほか、ゼミのインターンシップの活動として、先生が出演なさっていた環境番組のキャスターとレポーター

を体験することができました。その貴重な経験を通して、かねがね先生がおっしゃっていた「think globally, act locally」という考え方が身に付いたように思います。

濱野 皆さんありがとうございます。平成15年に商学科を卒業しました司会の濱野です。私は先生になりたいと子どもの頃から思っていて、商業の先生を目指そうと千葉商大に入学しました。入学後は、自治会の活動として、新歓、学園祭、オープンキャンパス、ISOなど、やれることは何にでも手を出していました。SAもやりました。このほかにも、自治会でできないことをやろうということで、IEFプロジェクトを立ち上げ、「ふれあいキャンパス市川」というイベントを開催しました。24時間365日1年中動き回っていたので、付いたあだ名が「コンビニ人間」。そ

の時の「何かをやりたい」という気持ちは今も変わっていないような気がします。

「私と同窓会活動」

―若い力できずなを紡ぐ―

濱野 皆さん、充実した学生生活を過ごされたようですね。今日のお席者では、宮坂さん以外の方はその後、一度は同窓会に参加しておられると思います。同窓会活動へ参加しようと思った理由や、同窓会への思いなどを聞かせください。まず、常任理事をなさっている半澤さんからお願いします。

半澤 学生時代は、同窓会に対するイメージがまるでなく、唯一、体育会系の部活動への奨学金や活動資金の支援などで同窓会の存在を知程度でした。卒業してからも10年くらいは、同窓生が何をしているかを



意識することはありませんでした。30歳を過ぎて後ろを振り返ってみるようになり、大学が今、いろいろと動いていることを知り、少しでも大学へ恩返しができたらという気持ちで同窓会活動に参加しました。3年ほど前から活動を始めて、組織委員会というところで、同窓会を盛り上げていくためには何をしたらいいのかということに取り組んできました。

山川 私の場合は、個人的には同期の方々やISOのメンバーなどとは、年に1回の忘年会などでつながっていたのですが、そこから先の同窓会にはどういう風に入っていくのかも分からない状態でした。今回、濱野さんに若いメンバーも増やしていきたいからお声掛けしていただいたのがきっかけで、広報・IT委員会での活動をスタートさせたところで

す。これから貢献できればと考えています。

加藤 私は、星野さんから若手卒業生が集まる会として、何かできないかとの提案が同窓会活動を考えるきっかけになりました。当時、賛同者の大半は新社会人として仕事に追われていたため頓挫してしまったのですが、私の中で「もっと同窓会を活性化させたい」という気持ち萌芽生えました。現在、新米経営者として奮闘しておりますが、仕事が落ち着きましたら、これまでお世話になった大学へ恩返しする意味でも同窓会活動に関わりたいと思っております。

星野 卒業して間もなくの頃、同窓会に行った時、ご年配の方が多くて同じような年代の方がいなかったのが非常に残念で。同窓生と、そして母校とつながりを持ちたいというこ

とと、後輩たちに還元をしたいという思いが常にあって、ずっと考えてきました。一度は絶ち消えてしまった同窓会の青年部の構想を、練り直して実現してみたいと思っています。各年次や各地でのプチ同窓会は行われているのですが、それぞれがつながっていないのが、もったいないですよ。特に千葉商大はすべての学科が1年から4年まで一緒のキャンパスという、ほかの大学にはない良さがあります。皆の顔が見られる場所に常において、その中で同じ釜の飯を食べてきたのだから、つながるための何かがありさえすれば、「きずな」を深めることができると思っています。

で全く同窓会に関わりを持っていない宮坂さんからは、同窓会がどのように見えるのかお聞かせください。い。

宮坂 同窓会に全く関わったことのない私が、今回呼ばれて、正直なところ戸惑いました。卒業してから、同窓会誌を何冊か見たことはあったのですが、同窓会ってもっと上の先輩方の集まりという認識でいました。仕事が深夜まで及ぶような状態で、自分の時間すら持てない感じで日々過ごしてきたので、同窓会に辿りつくパワーがなかったのが実際のところ。今回、濱野さんからお電話を頂くまで、同窓会が何をしているのか、総会で皆さんが何を話されているのか知らないでいました。これがかきつけで、何か私にできることはないか考えるようになりました。きつけかけがないと人は集まらないの

で、そのきつけかけとなる情報の場を私でもつくれるのかな、と。地元に戻ってしまった人たちが、上京した折に立ち寄ってもらえる場になるといいですね。

濱野 そうですね。こうして個別にお話する機会があれば、同窓会に気づいていただけるものなのでしょうね。私は、23歳からずっと同窓会活動に参加してきましたが、定期総会の後の懇親会では20代は自分1人という状態でした。最近やっと20代、30代の参加者が増えてきて、ありがたく感じています。これからも、誰かと何かを、誰かと誰かを、何かと何かをつなぐコネクター役を続けていきたいと思っています。

濱野 若手の同窓生から見た同窓会

「大学と同窓会」
— 今後の同窓会に望むもの



についてお話しいただきましたが、やはり若い方々の参加が少なく、卒業と同時につながりが切れてしまっているところに課題があるようですね。同窓会は、親睦と、母校の発展に寄与するという2つの目的を持っていますが、現状では親睦に重きが置かれてしまっている感があります。母校の発展に寄与するためには、同窓会と大学が手を取り合って車の両輪として機能していかなければならないと思います。そこで、大学側と同窓会の関係について、どのように手を取り合っていけばよいのか、ご意見をお願いします。

半澤 大学は学生を立派に教育し社会へ送り出す、同窓会は卒業した学生を取りまとめるというそれぞれの目的でそれぞれに動いてきたように思います。せっかく多くの卒業生を輩出しているのに、大学が継続的に

発展するための活動に卒業生がうまくつながっていないという実情のため、在学生の時から卒業後の同窓会が見える仕組みを作っていけば、もっと同窓会が在学生に働きかけることができると思っています。

星野 同窓会側もついに規約を改正して、これから変わっていくところですね。

半澤 同窓会が創立して四十数年。これまで制度の大きな変更をやってこなかったのですが、次第に動きづらくなっていました。今回規約を改正したことで、若い人たちへの活動の継承や、大学との協力体制の強化を進めやすくなることを期待しています。

山川 働きかけの一つとしてキャリアのサポートがあげられます。就職活動をしている学生にとって、OB・OG訪問は企業や仕事を知らる上で重要な機会となっています

が、卒業生から見ても在學生と卒業生がつながる非常によい機会だと思います。私はボランティアでゼミの學生に面接の練習やエントリーシートを書き方などを指導してきましたが、自主的にやるには限界がありません。役に立ちたいという潜在的ニーズのある方もいらっしゃるはずなので、それをつなげるシステムをつくることができれば、皆さんが一步を踏み出すことができるのではないでしょう。

星野 確かに、何かしたいという気持ちを実行に移すための仕組み・場所があれば、ほかにもいろいろなおとに貢献できますね。

半澤 そうした活動がしやすくなるように、今OB・OGのネットワークを濱野くんが立ち上げました。今後は、大学の就職セクションや同窓会が持っている情報がある程度一元

化して、卒業生や同窓会、大学側も更新できるプラットフォームを構築していきたいと思っています。

「同窓会の未来」

— 千葉商大愛をかたちに

濱野 自分と大学、同窓会活動、そして大学と同窓会について有意義なお話を伺えました。最後に「未来に帰った留學生たちが考えるCUCの未来」というこの座談会のタイトルの通り、同窓会や千葉商大の未来というものに対して、どのようにしていきたいとか、どのようなかたちが理想であるとか、皆さんの思いを教えてください。

山川 星野さんも毎回おっしゃっていることですが、私も学校が大好きなんです。だから、千葉商大が好きという愛校心を持った學生を増やしていきたいと思っています。自分自

身が貢献するのはもちろんですが、周りを巻き込む力もつけていきたいと思っています。

宮坂 皆さんのお話を聞き、敷かれたレールに乗っている學生が多いと伺ったので、學生に好奇心・興味を引くきっかけづくりをしたいと思いました。大学と同窓会、互いに待っているだけでは何も発展しないので、どちらかがラブコールをしていってあげないと。そして何かやりたいという卒業生と在學生が上手くコラボできるような場づくりが必要だと感じました。

半澤 私は、大学を出て十数年経ち、ある程度専門領域において仕事をしていた中で得てきたものを、成果として還元したいと思ってやってきました。ただ一個人では難しいので、それを皆と一緒にできるような場づくりをしていかなければいけないと考

えています。

加藤 皆さんの意見をなるほどと頷きながら聞いておりました。私は、組織が活性化するには、一人ひとりが自立して考え行動ができる環境づくりだと思います。これまでの慣習とされた常識を疑い、良き慣習は残しつつ時代に即した新たな価値観を組み合わせることが、次へのステップアップにつながると認識しています。その積み重ねの過程で自ら考え行動が出来る自立した人材を育て上げることが、将来、同窓会や大学が大きく発展を遂げる原動力になる要素と考えます。

星野 私は、千葉商大は日本一の大学だと思っています。なぜかという点、大学自体の道具も揃っているし、環境もある、先生もいる、伝統もある、全国に卒業生がいるし、企業の社長さん、経営者もいる、さまざま

な分野で活躍している人たちがいて、やっぱり日本一になる要因が揃っているんですよ。それを在学生たちは気づいていないし、卒業生も在学生に提供できていない。それを、これから私たちが積極的につながっていく、還元できればと考えます。その一助に自分もなりたいと思います。

濱野 最後に熱い愛校心の話が出てきました。自分磨きをしながらほかの卒業生の人たちと一緒に頑張って、少しずつでも自分たちで前へ進み、いずれバトンを次の世代に渡す時まで、頑張っていきたいと思います。そして、大学とも手を取り合って日本一の大学を目指していきたいでしょう。本日は、同窓会への思いをそれぞれの言葉で語っていただくことができました。ありがとうございます。

